



子供讚歌

倉橋惣三

一 白線の青年

1 お茶の水幼稚園

あの、お茶の水の幼稚園へ、ひとりでよく遊びにる白線の青年があつた。明治時代のことである。

ふらりと、湯島通の門からはいると、すぐ庭の方へまわつて、幼児たちのなかに交つて遊ぶ。一高の學生というので信用されたものか、おばさんのような先生方や、姉のような先生方とも懇意にされたが、一番親しみ迎えたのは幼児たちであつた。

『おにいちゃんが出来た』

幼児たちは彼のそばに集つて来ては、そういつてひつぱりまわした。なに一つ上手な遊び方を知つてはいないが、小がらで、ふとつて、まるい顔で、しじうにこゝ／＼しているところが、幼児たちにすかれたものか、どつちが相手をするのか、相手をされるのかわからない位、なかよしだつた。殊に、男の子たちは、やさしい女の先生ばかりの中で、丁度この位の男の遊び相手がほしかつたのかもしれない。先生方もそこを利用して、

『さあ、おにいさんに、お角力をとつておいたよきなさい』

といつては、地面の上に白チョークで大きな圓をかいて、土俵をつくつたりした。

藤の房が長く垂れて、美しい紫に咲く頃には、子どもたちを一人々々抱きあげて、手を花まで届かせてやる。それ

がうれしいといつて、次から次へ、かわる／＼抱いてもらいたがる。しまいには閉口して逃げだすと、それがまた面白いといつて、よけいに集つてくる。廣い藤棚の下を、子どもらに追いまわされている様子がおかしいといつて、先生方が手をたゝいたりする。大銀杏の梢が明るく日に映えて、黄いろの葉がひら／＼と舞つてくるのを、浴びるようにして、子どもたちと拾い／＼くらをする。にぎやかな笑い聲の中に、先生方の晴やかな聲もまじる。

青年は、保育室にはあまりはいらなかつた。その頃の保育は、かなりにきちん／＼としていたもので、それを邪魔してはならぬと思つたのもあろうし、フレーベル恩物や、こまかい折紙細工などは、彼には全くにがてであつた。でも遊戯室で遊戯がはじまると、誘い入れられてはこ／＼見物した。その誘い入れてくる主任保母さんは、雨森先生という、ほつそりした品のいい、もの靜かな年輩の人であつた。雨森さんは、青年の友人がおばさん／＼といつていた人で、青年がこうして遠慮なくこの幼稚園へ出入りできたのも、その關係があつたためだつたかも知れない。もつとも、彼の子どもすきは前からのことで、一中の四年生頃から、その當時創刊間もなかつた『兒童研究』を、よく分りもしないのに月々購讀して喜んでいた。それに、どつちかといえ、おぼつちやん育ちの方で一高寮にいなながら武道もせず、野球もせず、ストーム仲間にもはいらず、ひまがあれば、この幼稚園へ遊びにくるのを楽しみにするといつた、いは／＼おとなしい青年であつたのである。彼が幼稚園に遊びにくるのは、午後の授業の休みの日だつたが幼兒の圖畫や手技などを貰つてきて嬉しがつているのを、寮の同室の友人たちがよく笑つたものである。幼兒の粘土細工のへんてこな人形を、一つ呉れるよといつて表紙の破れたレクラムのそばに置いたりする、入浴ぎらいの男などもいた。

2 メドウ キンダーガルテン

ある春のこと。彼は友人の小野といつしよに、成田在の三里塚牧場へ出かけたことがある。ロマンチストであつた彼等には、牧場というのが先づ大きな魅力であつたのである。二人は牛や羊の群について、廣い牧場を歩きまわつた後、軽く疲れたからだを、柔い若草の上に横にした。青く霞む空、かけるうの燃える野、ぼか／＼と温い春光を浴びながら、暫くうつとりとしていたが、小野が突然いゝだした。

『いゝなあ、僕は大學を出たら牧場をつくる』

小野は前から農科志望であつた。

『牛乳を澤山のませてくれるか』

この、のどのかわいた返事は、晝夢を満足させなかつた。

『まじめな話だよ。……こんなに大きくなってもらいがね』

『うんと広い方がいゝじやないか』

『そうだね。その中にコッチェチも幾つか建てるよ』

手にしていたカツセル假とち本のウォルツォース選集を、草の上へ軽くほうりだして、小野の方へ顔をむけた彼は小さい目を輝かせて言つた。

『僕にも、そのそばに幼稚園をつくらせてくれないか』

『そりやあいゝね』

『太い丸木の門柱を二本たてよ。……牧場の名は何んとする』

『さあ。……君の幼稚園は』

『名前なんか無くたつていゝね。一方の門柱にメドウ、一方の門柱にキンダーガルテンと書いておこう』

『ハ、ハ、それがいゝね。間の境は……』

『そんなものいらぬよ。牧場全體が幼稚園の庭なんだもの』

『廣いよ』

『いゝさ、草一ぱいにね。丘もあり谷もあり……』

小野は目をつぶつて言つた。

『愉快だなあ』

それから春や幾春。小野が大學を出て、北陸地方の農學校長になつた時に、その學校のために彼が校歌を作詞するといつた風に、若い日の友情は長くつゞいたが、惜しむべし、夢のメドウは實現せず小野は逝いた。再び春は幾春夢のメドウ・キンダーガルテンは……。

3 最初のペスタロッチ傳

青年が初めてペスタロッチ傳に接したのはこの頃であつた。夏休みにドガンプのペスタロッチ傳の英譯に讀みふけた。彼はその後多くのペスタロッチ傳を漁り、その著作を研究した。しかし、この最初のペスタロッチ傳ほど、彼を純な感激に涵したことはない。それは、その時まで教育學の學徒でもなく、専門的研究者でもなかつたからであるに相違ないが、敢て純な感激というのば、なんといつても、若さの鼓動からであつた。

彼はいつも夏休を學校の課業に直接關係のない讀書の時間として、しつかりした、まとまつた書物を選ぶことにしていた。それが、それ／＼の方面で、どの位青年の生命を培つたかしかない。どれも貴重な魂の糧にならぬものはなかつたが、たゞ攝取したというだけでなく、眞にその書にとらわれ、その書のとりこになつたといつていゝものは、このペスタロッチ傳であつた。とりこになつたのは、その一と夏ばかりではない。一生がそのとりこになりつゞけたといつていゝ。

彼は何事にも奮然として志を立てるといつた風の確乎たる性格の青年ではなかつた。また、深思して生涯の計畫を定めるといつた現實性の持ち主でもなかつた。だから、ペスタロッチに感激したからといつて、すぐに大教育者になりたいといふことを目的とした譯でもなかつた。いつてみれば、たゞ『その人』に陶醉したのであつた。もう少し深めていえば、以前から精神の師として教えを受けていた内村鑑三先生の『後世への最大遺物』によつて、成功とか功名とかのほかに人生があることを、かすかながら考えていた彼が、ペスタロッチの生涯に成る安定を見出したのであつたろう。ドガンプの『ペスタロッチのライフとウァーク』は『この人』に近く接していた人の著述として、ウァークよりも、否、ウァークを叙しつゝ、恩師のライフへの敬仰のこゝろに溢れているのである。彼はこの本を誰れかに貸し失つて仕舞つたが、殆んど全ページに、殊に始めのノイホフの章や、中頃のスタンツの章に、若ものらしく赤や青のアンダーラインが色濃くひいてあつたことを、いまでも忘れない。勿論ペスタロッチの生涯はその事業を離れてはない。しかし、兎に角、彼は、その時から『ペスタロッチに酔える人』になつたのである。

青年が何んの機會でペスタロッチ傳に接したかは記憶にない。彼の所謂夏休の讀書は、どちらかといえは主として文學、殊にクラシツクの方で、その頃出た徳富芦花の『思ひ出の記』の主人公が、文學に志してその世界の餘りにも

無限なのに對し、茫洋の嘆という言葉を發しているのを、さも自分の文字のように口にしていたりしたのであつた。友人たちにも、大學では英文科の方へでも進むものと思われていた。それが、誰れに示され、どういうきつかけで、この本に接したのか、その機縁を思いだそうとして思いだされない。

人生、心の友を得るのも偶然が多いが、心の書を得るのも偶然が多い。おもうにこの書もつとめて蒔かれたのでもなく、勿論強いて植えつけられたものもなく、自ら選り求めたのでもなく、ふと風に運ばれた種子であつたのかもしれない。それがいゝというのでもない。彼はいつでも、そういう風に幸されている。恩恵はどこにあるか、はかり知れない。

彼の最初に讀んだ大教育者傳がフレイベルであつたら、これから長くつゞくであろう此の物語りの書き出しとして、一層構成的妙を得られるかもしれない。しかし、物語りはそううまくばかり運ばない。それどころか、彼がフレイベル傳を讀んだ最初は、ずつと後のことである。彼は早くから幼稚園へ遊びにゆくことを好んだが、フレイベルの幼稚園に對する理會や、沉んやそれに對する傾倒を以てした譯ではなかつた。幼稚園よりも幼児の群を訪ねたのである。幼い子ども達に遊ぶために、幼稚園へ出かけたのである。これは、フレイベル傳を早くから讀んでいなかつたためかもしれないが、思へば、それは彼のために、少くもよくないことではなかつた。後の彼は、言うまでもなく、フレイベルの研究であり禮讀者を以て自ら任ずるようになった。ペスタロッチよりもフレイベルの方に通じているかも知れない。キンダーガルテンの名稱をフレイベルのオリヂナルにおいて魅力を感じる彼であるけれども、そのフレイベルの幼稚園を見にいつたら、そこに子どもがいたという譯ではない。名山の名にひかれて花を訪ねたのでなく、花を見にいつたら名山だつただけの話であつたといおうか。それも彼のためによくないことではなかつたばかりか、却つてよいことであつたかもしれない。彼は後になつても、キンダーガルテンの名づけ親はフレイベルだけれども、フレイベルに幼稚園を創設させるものは幼児そのものだと言つてゐるが、彼の幼稚園通いも、フレイベルに導かれたよりも、子どもに導かれたのが、抑々の初めだつた。そうこうしてゐるうちに、はからずも此の最初のペスタロッチ傳に、めぐり逢つたのである。それでこよかつたなんて決していわないが、兎に角、そうだつたのだ。

(つゞく)